「私はあなたがたを 友と呼ぶ」(1) ~ 神様には友がいるの か?~

を学ぶでしょう。キリスト者の生活についての新しいシリーズが始まります。

2021/01/20

携帯電話のメッセージで私たちが頻 繁に受け取る質問と言えば、多分 「どこにいるの?」でしょう。それ て私たちも友達や家族に、遠くに能 れていても連絡を取り合うために、 或いはただ単に相手の様子を知りた くて「どこにいるの?」「何をリ ったメッ っといったメッ セージを送っていることでしょう。

神様も、こうした質問をエデンの園でアダムとエバに投げかけられました。

「その日、風の吹くころ、主なる神 が園の中を歩く音が聞こえてきた。 アダムと女が、主なる神の顔を避け て、園の木の間に隠れると、主なる神はアダムを呼ばれた。『どこにいるのか』(創世記3,8)。

創造主なる神は、この世の始まりの 時からアダムとエバと共に歩むこと を望まれたのです。少し大胆な言い 方をすれば、神様は彼らとの友情を 求められたのです。そして今も、 様は私たちとの友情を求めておられ ます。ご自分の創造の計画がすっか り成し遂げられていくよう見守るた めに。

より確かなものとなる前代未聞の事 実

神様と友達になり得るというこの事 実は、今の私たちにとって全く新し いことではないかもしれません。 かし、人類の思想史ではかなりの驚 きをもたらしました。実際、ギリ シャ哲学の全盛期、アリストテレス は、人間が神の友となる可能性など ないと認めざるを得ませんでした。 その理由は、両者の間に絶対的な不均衡、あまりにも大きな違いがあるということでした[①]。当時、人間は、せいぜい何らかの儀式で神々の崇敬を示すか、神性についての概念的な知識を得る程度のことしかできないと考えられていました。神様との友情関係など想像もできないことだったのです。

ところが、聖書の中では、私たちと 神様との関係に何度も「友情」とい う言葉が使われています。出エジプ ト記33章11節はその明らかな例で す。「主は人がその友に話すよう に、顔と顔を合わせてモーセに語ら れたし。雅歌には神を求める霊魂と 神様の関係が詩的に表現されてお り、霊魂はしばしば「私の友」と呼 ばれています。また知恵の書7章27 節に「(神は)代々にわたって聖な る魂に移りゆき、彼らを神の友と し、預言者とする | とも書かれてい ます。驚くことは、これらのどれを

取ってもイニシアチブを取られるのは神様であるということです。神様がご自身の被造物と結ばれた契約は、均衡のとれた、同等の立場の不も同志によるものではなく、全くかわらいな約束でした。にもかも同るいな約束でしたとあたがも同じと対話ができるとしてしまうほどの可能性をいただいたのです。

神様の方から人間に友情を示そうと されるといったこの前代未聞の事実 は、救いの歴史の経過とともに更に 確かなものとなっていきます。旧約 を通して人類に与えられた全ての啓 示は、神の子のこの地上でのご生活 によって決定的な照らしを受けま す。「神は、私たちを被造物として だけではなく、子どもとして愛して 下さり、キリストにおいて真の友情 を注いでくださいます| [②]。イエ スの生涯の全ては、私たちに対する 御父との友情への招きです。特に最

後の晩餐において、この良き知らせ (神との友情)は格別な力強さとり 白さを持って私たちに伝えられました。 晩餐が催されたあの部屋でが彼れ イエスの一つひとつのしぐされてる 心の内を表していました。 イエスはの弟子たちを、そして のまって終ると共に私たちをも神様と 正真正銘の友情に導こうとされたのです。

塵から生命いのちへ

ヨハネの福音書は、2つの部分に はっきり分かれています。前半はキ リストの説教と奇跡について、後半 はご受難と死、ご復活について書かれています。そして、最後の晩餐の シーンの導入部、13章1節がこの2 つの部分を結ぶ役割を果たしての立るで、過越の祭りの前のらくます。イエスはこの世からのをもいるの時が来たのをもといる弟子たちを愛して、終 わりまで愛し抜かれた」。そこには ペトロとヨハネ、トマスとフィリ ポ、そして他の8名の弟子たちが、 当時の習慣のように、身を横たえて いました。ヨハネの記述から、おそ らくイエスはU字型のテーブルの上 座に着かれ、ペトロはそのちょうど 真向かいの、普通は僕が座る場所 に、きっとイエスと対面する形で席 に着いていました。その時イエス は、手ぬぐいを取って腰に身に付 け、たらいを取り、友である弟子た ちの足を洗われました。主がまだ幼 い頃、聖母が度々そうやってお世話 をされていたであろうように、主は 立ち上がって、彼らの足の塵を拭わ れたのです。もちろんそれは上席に いる者の仕事ではなかったのにもか かわらず、

ところで、この「塵」のイメージは 聖書の最初から出てきます。創世記 2章7節に次のような件くだりがあり ます。「神である主は土の塵で人を 形づくり、命の息をその鼻に吹き入 れらた。そこで人は生きる者となっ た」。神さまは人を土の塵で作られ た時、生命のない、他者と関わりを 持つことができない存在のまま放っ ておかれませんでした。神様は命の 息を吹き込まれて人を生きる者とさ れたのです。その瞬間から人は塵で あり、かつ霊であることからくる緊 張、根源的な限界の一方で無限なも のへあこがれる緊張を経験するよう になったのです。けれども神様は私 たちの弱さよりも、私たちのどんな 裏切りよりも強いお方です。

さて、最後の晩餐の高間で人間の 「塵」が再び現れます。キリストが 友の足の塵の前で身をかがめられる のです。彼らを御父との絆に立ちら らせるため、新たな創造のためにら イエスは私たちの足もお洗いになり ます。「塵」にしか過ぎない私たち を神化し、ご自身が有する御父とが 親密な友情に私たちも与ることがで きるようにしてくださるのです。親 しみの雰囲気が満ちた高間で、弟子 たち全員が彼を見つめている中、 は言われます。「もう私はあなが何を は言われます。(僕は主人が何を しているか知らないからである。 はあなた方をと呼ぶ。私は方に知 はあたことすべてを、あなた方に知 らせたからである」(ヨハネ 15.15)。

神さまはすべてを分け合おうとされます。イエスは彼自身の命を、そして、愛し、赦し、最後まで友となることができる力を私たちに分け与えられるのです。

良い友達関係が自分を変えたという 経験を誰でもしたことがあるでしょう。ひょっとするとそうした友情が なければ今の自分は居なかったかも しれません。神様と友だちになる と、私たちの周囲の人たちとの友情 の結び方も変化します。キリストの ように皆の足を洗い、私たちを裏切る可能性のある人とも食卓を同じたもし、私たちを理解しない人、さえ、私たちを理解しない人にさるではいた。 私を受け付けない人にさる。 は、全でのもとができるがように開いてであると、全ての人のもとが作られたのもとなら神様は今も私たちが作られた。 は、「鹿」に見を吹きかけ、ご見を吹きかけ、「鹿」に見を吹きかけ、「鹿」に見を吹きかけ、「鹿」に見を吹きかけ、「鹿」に見を吹きかけ、「鹿」に見を吹きかけ、「鹿」に見を吹きかけ、「鹿」に見を吹きかけ、「鹿」に見を吹きかけ、「鹿」に見を吹きかけ、「鹿」に見を吹きかけ、「鹿」に見を吹きかけ、「鹿」に見を吹きかけ、「鹿」に見を吹きかけ、「鹿」に見を吹きかけ、「鹿」に見を吹きかけ、「鹿」に見を吹きかけ、「鹿」に見を吹きかけ、「鹿」に見を吹きかけ、「鹿」に見るできた。

「塵」に息を吹きかけ、ご自分の光 で私たちの友情を照らし続けておら れるからです。

神さまとの交わりへと導かれるまま に

これまで、主が私たちに注がれる友情が神様の私たちに対する無条件の、決して終わることのない信頼の印であることを見てきました。20世紀が経ち、キリストは私たちの日々の生活の中で、御父について知っていることを全て私たちに伝え続けて

下さっています。私たちを今も神様との友情に導くために。但し、そのためには私たちの個人的な応えが必要です。「神のみ旨に私たちの意志を一致させることで、つまり主がお望みの事を実行することによってこの友情に応えましょう」[4]。

本当の友達なら心の交流がありま す。互いの心の深奥で、同じことを 好み、互いの幸せを望む。互いの事 を理解し合うために、時には言葉を 使うことすら要らないのです。同じ ことで笑うということは互いの親し さを最もよく示す印だとさえ言われ ています。神様との交わりも同じで す。神様と友情を結ぶとは骨の折れ る努力をして必要条件を満たそうと することではありまえん。そんなこ とは友達の間ではそぐわない態度で す。神様と友情を結ぶとは、時間を 共有し、互いのそばにいることなの です。

その良い模範は福音史家聖ヨハネの 態度でしょう。彼はイエスが近づ き、彼の足を洗われるに任せ、食事 中は安心しきって頭をイエスの胸に もたれかけ、そして最後には、(お そらく何が起こったのか完全に理解 はしていなかったでしょうが)最良 の友から離れようとはせず、すさま じい苦しみの中で、友の傍に留まっ たのです。主から愛された弟子は、 イエスが自分を変えていくままに委 ねたので、神様は彼の心から少しず つ「塵」を取り除いていかれたので す。「こうした意志の交流によって 私たちの贖いは実現するのです。イ エスの友になりましょう。イエスの 友となるよう自分を変えましょう。 イエスを愛すれば愛するほど、彼の 事を知れば知るほど、私たちはより 本当の自由を得て、贖われた喜びに 満たされるのです| [⑤]。

イエスは最後の晩餐で友情の秘訣は 彼の下に留まることであると示され ました。「ぶどうの枝が木につな がっていなければ、枝だけでも実を 結ぶことはできない。それと同じまで うに、あなた方も私のうちとは留まで なければ、実を結ぶこいかい」(ヨハネ15,4)。「ないけい」で充分とは言えないに してもマリアは書いておられませる 聖ホセマリアは書ば、あなたは愛するならば、あなたは愛するならば、あなたは愛するなられどう。「⑥〕。

* * *

「どこにいるのか」、神様は、ご自 分の手によって創造された素晴らうい世界を歩かれながら、このよって創造されたのよう。 人間に言葉を掛けられました。そとと で今も私たちと会話を始めることと 望まれています。神様は私たちとと にいたいと思われ、私たちとと にいたいと思われ、私たちと大 を強く望まれています。それもうと、 を広げて私たちを受け入れようと、

- [①] アリストテレス、『ニコマコス 倫理学』、1159a, 4-5参照。
- [②] フェルナンド・オカリス、司牧 書簡、2019年11月1日、2番。
- [③] 聖ホセマリア『拓』193番参照。

- [④] フェルナンド・オカリス、司牧 書簡、2019年11月1日、2番。
- [⑤] ヨセフ・ラッツィンガー、教皇 選出ミサ説教、2005年4月18日。
- [<u>⑥</u>] 聖ホセマリア、『十字架の道行』、第8留、黙想のしおり、5 番。

Photo: Alex Bertha, on Unsplash

pdf | から自動的に生成されるドキュメント https://opusdei.org/ja-jp/article/tomo-to-yobu-1/(2025/12/13)